

「共生」

愛媛県・余土中学校
1年 藤澤 宣成さん

ぼくの妹には知的障がいがある。それに気づき始めたのは、幼稚園の頃だ。双子なのになぜぼくだけ幼稚園に行くのか。その不思議は、年齢が上がるにつれて多くなってきた。なぜ、普通に会話ができないのか。なぜ、簡単なことを頼んだのにやってくれないのか。なぜ、急にどこへでも行ってしまうのか。不思議だと思っていたことは不安に変わってきた。その頃、母から聞いた。妹には障がいがあると。

三年前まで、ぼく達家族は広島に住んでいた。小学三年生の時からぼくは学区の野球チームに入って平日も夜遅くまで練習をしていた。妹は気が向いたらお母さん方と球拾いをしてくれることもあったが、だいたい小学校のグラウンドのすみにある遊具で遊んでいた。でもこの日はちがって母が球拾いをしている間に妹の姿が見当たらなくなった。ぼくも探しに行きたかったが、夜暗くなっていたので危ないと言われ、仕方なく学校で待った。まずは保護者の方々と監とくが探し

に行ってくれた。誰かがチームの保護者会のOBの人に連絡をしたら、またたくまに町内会や子ども会の関係者にまで話が伝わり、近所を探してくれていたそうだ。同時にそのさわぎに気づいた小学校の先生方が、かい中電灯を持って一緒に探しに行ってくれた。その時、ぼくの心の中は、車にひかれていないか、川に落ちていたりしていないか、ゆうかいさいだった。探し始めて約一時間後妹と母達が帰ってきた。ぼくはとにかくホッとした。母は大泣きしていたが、妹は母と手をつないでニコニコしながら帰ってきた。障がい者一人に対し野球の監とく、地域の方々、そして小学校の先生方が一致団結して探してくれて、本当にありがたかった。この出来事はまさに「地域・社会との共生」だった。なぜこれほどたくさんの方々を妹を心配して行動を起こしてくれたのだろうか。それは普段から妹も地域活動や子ども会活動、ぼくの学校の行事などに参加していたので地域社会との深いつながりがあった。だから困った時に助けてくれるという関係ができていたのだ。

広島を去って二度の引越後、今は松山市に住んでいる。ぼくにはすぐに新しい友達が大勢できたし、すぐに新しい環境になった。だが、妹は広島に住んでいた時のような地域社会との関わりはまだない。あの頃、ぼくが子ども会や地域のチームに入ってくれたから、地域社会とのつながりがより一層

広がったと母に感謝されたことがある。でも今はどうだろう。妹のことは一部の友達にしか知らせていない。できれば言いたくない気持ちもある。中学生になっても母と手をつなぎ、独り言を言って急に歌ったり踊ったりする妹とぼくがいるところを見られたくなくて近所で一緒に行動するのは嫌だと思ふようになった。ぼくのおかげで広まった人とのつながりはせまいものになっている。もし今、あの時のように妹がいなくなったらどうなるだろう。あまり声をかけてくれる人もいないし、ご近所の方々ですらまだ妹に慣れていないので、助けてほしいとお願いすることもできない。こんなのでどうやって見つけることができるのだろうか。

「共生」という言葉を聞くけど今の状況は地域との共生にはほど遠い。まずは自分自身の意識を変えようと思う。友達に妹のことを聞かれたら説明できるように自分のバリアを取り除きバリアフリーにしたい。そして家族全員が地域の行事や活動に参加しやすくしておきたい。地域の人達の間がりを広げお互いが助けたり、助けられたりし合うことでより良い社会になることをぼくは、知っているはずだ。